

教育学研究科・グローバル教育展開オフィス

後川慶一・教育哲学コース・修士1年

国際学会:アジア型大学探求プロジェクト(CERC and Kyoto University Joint Roundtable)

参加地:香港・2024/3/2-2024/3/6

発表題目: Education of Tea Ceremony

成果の概要

本プロジェクトは二点において非常に有意義なものだった。一点目はアジアの大学との連携の可能性である。香港大の生徒による発表は、多くの批評点がありつつも、我々の研究と共通の土台を見つけられるものだった。例えば、ディスカッションの中で「悟り(enlightenment)」というワードが挙がった際に、どちらの学生も当然のように意見を出し、議論が進んでいったことがあった。このことの特異性を、欧米出身の教授から指摘されたが、文字や習俗、思想を含む文化、また、近代科学で用いられる単語など、お互いが共有している部分が多くあることを今回の訪問で再認識した。それは、日本から欧米に向けて発信する際には障壁となっているものが、アジアにおいては問題にならないということでもある。今回のテーマの一つは「アジアの大学」であったが、両大学がいかに欧米中心の価値を持つ世界の中でプレゼンスを示していくかを考える際、多くのヒントが今回の訪問にはあったように思う。香港大の教授からは、日本からの発信の必要性が説かれるのを、何度も耳にした。欧米の価値観とアジア的なアプローチの融合をいかに実現するかというテーマを考える際、日本が成してきたことや日本が研究していることは非常に重要である。アジアの国々は、日本の成果をシェアしたいと望んでいるにもかかわらず、日本からは、なかなか声が挙がってこないという指摘。他国に日本の研究が望まれているということを知るだけでも有意義な機会だったと感じる。また、同時に、香港大との差異を知ることで、自分たちの研究の独自性を知る機会でもあった。その一つとして指摘されたのが、日本の研究の多くには実践があり、今現在進行形で社会で起こっていることと理論をうまく重ね合っているというものだった。香港と比較すると、日本には教育フィールドが豊かであり、多様な研究対象があることを再認識させられた。今回の訪問で、改めて日本に残る伝統や、表面的には失われているかにみえて根底のところでは影響している慣習などが多くあることを認識できた。

二点目は、学際的な交流の重要性である。今回、プロジェクトに参加した学生、ならびに教授陣は、様々な所属先から集まっており、普段は接することのない様々な知見を得る機会があった。香港大では、各人が英語で発表したのだが、それらを聞くことで、自分の研究とは異なるアプローチや対象を用いていることを知ることができ、大変、参考になった。また数日間、ともに過ごす中で様々な話をし、学生が置かれている現場や、他フィールドに起こっている問題などをシェアすることができた。京都大学のキャンパス内で他コースの発表をただ聞いているのとは違う深度の理解が得られたことは、意外な収穫であった。加えて、今回のプロジェクトがうまくいった要因として、訪問メンバーが多彩だったことも挙げられる。京都大学のメンバーの中には、中国、アメリカ、ブラジル、イギリス出身のメンバーがおり、また、社会人経験者も少なくなかった。そうしたメンバーの多様さによって、単に香港と京都を比較したり、研究対象としての教育という視点からのみ語るのではなく、より広い視点から議論することができたように思う。単に同じような背景を持つ学生だけが集まっても、広がりのある議論はできなかったのではないかと感じた。

プロジェクトの最終日には、これからの両大の連携についてディスカッションを行ったが、誰もが前向きであり、これを一過性のものとして終わらせないようにしようという姿勢が見られた。今回は初回ということもあり改善点も多くあったと思うが、これからも継続していくべきプロジェクトだと強く感じた訪問だった。